

## ■ とりあえず、米・日株価やドル/円に戻り一巡感

前回の本欄において「米株高でリスクオンのムードがドル/円の下値を支える」、「NY ダウ平均は《中略》75日移動平均線（75日線）が位置する水準や25000ドルの節目を試す可能性も大いにある」などと述べた。実際、先週18日にNY ダウ平均は75日線を試す展開となったが、そこで一定の到達感が広がった模様で、今のところは同線が上値の抵抗として意識されている。

もとより、1月4日以降の上昇がかなり急ピッチであったことから、NY ダウ平均が一旦調整含みの展開となるのは道理と言える。一方で、先週18日にドル/円は一時109.89円まで、そして



昨日（23日）は一時110円まで上値を伸ばす場面があり、結果的に一目均衡表の週足「雲」上限に一旦到達した（左図参照）ことから、こちらも目先的には戻り一服ということになった。

ちなみに、ドル/円の109.80-110.00円処というのは、昨年12月初旬の高値から今年1月3日安値までの下げに対する50%戻しの水準でもあり、いずれにしても110円に接近する展開となるとそこで一旦売り戻されやすい。

り戻されやすい。

さらに、日経平均株価が今週21日に一時つけた2万0892円処というのは、昨年12月3日高値から12月26日安値までの下げに対する「ちょうど半値戻し」の水準にあたり、これまた目先は戻り一巡感が漂いやすい。つまり、NY ダウ平均やドル/円、日経平均株価は、ともに足下で重要な節目までの戻りを試し、そこでとりあえずは戻り一巡となったわけである。

なお、足下では米主要企業の2018年10-12月期決算の発表が続いており、昨日あたりもIBMやユニテッドテクノロジーズ、P&Gなどの決算結果が概ね好調であったことから、一時的にも米株価がかなり強含みとなる場面もあった。総じて、想定していた（過度に悲観視していた？）よりも米企業の決算は好結果であることが確認されており、その点はドルの下値を支える一因となっている模様である。ただ、なお米政府機関閉鎖が続いていることや米中問題が先行き不透明であることに変わりはなく、そこは投資家も慎重にならざるを得ないところであろう。

一方、1月4日以降引き続きポンド/ドルの上昇傾向が続いている点にもあらためて注目しておく必要はあろう。先週17日以降は一目均衡表の日足「雲」を上抜ける動きとなっており、さらに本日（24日）は200日移動平均線（200日線）を上抜ける動きとなってきている。

既知のとおり、英国のEU離脱交渉は依然として不透明な状況が続くものの、最終的に「合意なき離脱」につき進む可能性はかなり低下していると市場では見られており、まずは離脱期限の延長、そして場合によっては「2回目の国民投票実施で離脱反対派が勝利」という可能性までジワリ市場が織り込もうとしているかのようである。

とまれ、足下でこれだけポンドが強い状況になっているという点も考慮（割り引き）したうえで、目の前のドルと向き合うということも重要であろう。現在、ドルの上値には政府閉鎖や米中問題などの重しが押し掛かっているわけだが、来週30日に予定される中国副首訪米の結果などによっては、そうした重しが段階的に外れて行く可能性もないではない。米政府閉鎖についても、国民の評判がすこぶるよろしくないことは言うまでもなく、トランプ大統領がどこまで「メキシコ壁建設費用の予算盛り込み」を主張し続けられるか、引き続き要注目である。

(01月24日 09:40)